

平成22年度遺跡速報展 後期展
(発掘調査編)

いにしへのツギハメ'10



朝倉下 下経田遺跡
川跡に投げ込まれた土器

あさくらしも しもきょうでんいせき 朝倉下 下経田遺跡 (今治市朝倉下)

今治平野に向かって流れる頓田川の中流域左岸に立地しており、平成 18 年に弥生時代の平形銅剣が出土した経田遺跡とは道路を挟んで隣接しています。

今年度の調査では、弥生時代～古墳時代の集落が広範囲にわたって見つかりました。集落のなかには、ゆるやかに蛇行した川の跡があり、川には 2000 点を越える土器が投げ込まれていました。土器の量は日常的に使う量をはるかに超えており、鉄剣などが入れられていることなどからも、何らかのマツリに使用されたものと考えられます。

川跡のすぐ横で、弥生時代終わり頃～古墳時代はじめ頃(約 1,800 年前)の竪穴住居約 20 棟、古墳時代中期(約 1,500 年前)の竪穴住居 2 棟、古墳時代後期(約 1,400 年前)の竪穴住居約 30 棟が見つかりました。合わせて 60 棟もの竪穴住居が確認されたのは、一つの遺跡から見つかる住居数としても多く、また、多数の竪穴住居が重なって建てられていることから、古くなった住居を建て替えながら、同じ場所に長期間人々が住み続けたことがわかりました。

遺跡は頓田川まで数 100m と近接した位置にあり、川の氾濫などの影響も考えられる不安定な土地でありながらも、自然堤防などの微高地を利用して集落が営まれた様子が明らかとなりました。



古墳時代後期の竪穴住居

あさくらのなみ いまわかいせき

朝倉南 今若遺跡 (今治市朝倉南)

しもきょうでんいせき

下経田遺跡より 1km 程南東に位置しており、頓田川

とんだがわ

へと流入する黒岩川右岸に立地しています。

くろいわがわ

今年度は、弥生時代～古墳時代の集落を調査し、堅

あなじゅうきょ

ほったてばしらたてもの

どこう

みぞ

たて

穴住居のほか、掘立柱建物、土坑(穴)、溝などが見つかりました。

たてあなじゅうきょ

堅穴住居のなかには、屋根や柱に使われた木材が焼

け

しょうしつじゅうきょ

け残った焼失住居が1棟見つかっています。直径約7m

を測る弥生時代後期(約1,900年前)の円形住居で、炭

やよいじだい こうき

化した木材は住居中央から放射状に広がっていました。

しょうしつじゅうきょ

焼失住居



木材は太さ約 15~20cm、長さ約 1.0~1.5m の規模で比較的良く残っていました。これらは堅穴住居の構造を知る上で重要な資料といえ、今後木材の種類を調べるなど科学的な分析も行う必要があります。

また、弥生時代中期後半(約2,000年前)の土器をまとめて入れた土坑(穴)も見つかりました。凹線文と

やよいじだい ちゅうきこうはん

どこう

おうせんもん

よばれる文様の入った高杯や甕などがあり、底部に孔をあけた甕も入れられていました。不要になった土器を捨てたのであれば、割れた土器ばかりが出てくるのですが、完全な形の土器も多く、単にゴミ穴として使用したのではなく別の目的で土器を入れたものと考えられます。

いしてむらまえいせき

石手村前遺跡 2次 (松山市石手)

いしてむらまえいせき

石手村前遺跡は、松山平野北部の石手川扇状地に立

せんじょうち

地する遺跡です。遺跡の西には道後湯築城が、東には

ゆづきじょう

石手寺があり、この付近一帯は中世伊予国の政治・経済・

いしてじ

ちゅうせい

いよこく

宗教の中心地であったと考えられます。調査は平成 20

年度に引き続き 2次調査となります。

調査の結果、古代から中世にかけての堅穴住居、掘

こだい

ちゅうせい

たてあなじゅうきょ

ほっ

立柱建物、土坑(穴)、溝、柱穴が見つかりました。遺

たてばしらたてもの

どこう

みぞ

ちゅうけつ

い

構は遺跡の東側、石手寺に近づくほど密度を増してい

ます。また、当時一般庶民はなかなか手にすることの

できなかつた、青磁などの輸入陶磁器や瓦も見つ

せいじ

ゆにゆうとうじき

かわら

ことからも、たとえば僧侶など、身分の高い人

のための建物があつたと考えられます。

また、遺跡の性格を表すものとして、土師器の杯・皿を大量に捨てた土坑があります。こうした遺構は武

家屋敷などによく見られるもので、湯築城跡からも見つ

かつています。武士が結束を高めるため宴会を開き、

そこで使われた土器を捨てたものと考えられています。石手寺は平安時代から室町時代にかけては河野氏の

保護を受けて栄えたと伝えられていますが、この資料は石手寺と河野氏との関係性を考えるよい資料といえ

ます。

また、遺跡の性格を表すものとして、土師器の杯・皿を大量に捨てた土坑があります。こうした遺構は武

家屋敷などによく見られるもので、湯築城跡からも見つ

かつています。武士が結束を高めるため宴会を開き、

そこで使われた土器を捨てたものと考えられています。石手寺は平安時代から室町時代にかけては河野氏の

保護を受けて栄えたと伝えられていますが、この資料は石手寺と河野氏との関係性を考えるよい資料といえ

ます。



はじき

どこう

土師器を捨てた土坑

また、遺跡の性格を表すものとして、土師器の杯・皿を大量に捨てた土坑があります。こうした遺構は武

家屋敷などによく見られるもので、湯築城跡からも見つ

かつています。武士が結束を高めるため宴会を開き、

そこで使われた土器を捨てたものと考えられています。石手寺は平安時代から室町時代にかけては河野氏の

保護を受けて栄えたと伝えられていますが、この資料は石手寺と河野氏との関係性を考えるよい資料といえ

ます。

また、遺跡の性格を表すものとして、土師器の杯・皿を大量に捨てた土坑があります。こうした遺構は武

家屋敷などによく見られるもので、湯築城跡からも見つ

かつています。武士が結束を高めるため宴会を開き、

そこで使われた土器を捨てたものと考えられています。石手寺は平安時代から室町時代にかけては河野氏の

保護を受けて栄えたと伝えられていますが、この資料は石手寺と河野氏との関係性を考えるよい資料といえ

ます。

どうごいまいちいせき
道後今市遺跡 16 次 (松山市道後北代・祝谷)

どうごいまいちいせき どうごへいや せんじょうち
道後今市遺跡は道後平野北部に広がる石手川扇状地
せんおう いせき どうごじょうほく
の扇状付近に位置しています。遺跡のある道後城北地区は、平野内でも有数の遺跡密集地帯として知られ、
いせきみっしゅうちたい
道後今市遺跡も今回で 16 回目の調査となります。

今回の調査では、縄文時代～中世にかけての集落跡や川の跡などが見つかりました。

じょうもんじだい じょうもんじだい こうき ばんき
縄文時代では縄文時代後期～晩期 (約 4000～2500 年前) に流れていた川の跡が数条見つかり、川底からは当時使われていた土器や石器が見つっています。今回の調査では縄文時代におけるこの地での人の活動の跡は見つかっていないので、これらの土器は調査区のさらに上流域に、この時期の集落が存在する可能性を示しています。

こふんじだい たてあなじゅうきよ どうこう こふんじだい ちゅうき
古墳時代では、方形の堅穴住居や土坑などが見つかりました。これらは 5 世紀頃 (古墳時代中期) の集落の一部と考えられます。

ちゅうせい ちゅうけつ どうこう みぞ
中世のものでは、柱穴や土坑 (穴)、溝などがみつっています。これらは 13 世紀後半～15 世紀後半頃のもので、湯築城を中心とする道後城北地区の町なみの移り変わりを考える手がかりとなるものです。
ゆづきじょう どうごじょうほくちく



中世の集落跡

きたいどいせき
北井門遺跡 2 次 (松山市北井門)

しげのぶがわ うちかわ
北井門遺跡は松山平野の南部、重信川と内川の合流点付近に立地しています。松山外環状線建設に伴って行われた本調査では、縄文時代後期・晩期、弥生時代前期・後期、近世の遺構・遺物が見つっています。

じょうもんじだい ばんき たてあなじゅうきよ どうこう
縄文時代晩期のものとしては、堅穴住居や土坑が見つっており、土坑の中には土器を埋めたものやお墓と考えられるものもあります。こうした様子から、縄文時代にはすでにこの場所に集落とお墓が作られていたことが分かります。

やよいじだい ぜんき みぞ やよいじだい こうき たてあなじゅうきよ みぞ や
弥生時代前期のものとしては、大型の溝、弥生時代後期のものとしては堅穴住居・溝などがあります。弥生時代前期の溝はまだ調査をしていない区域も合わせると、約 80m の長さがあります。溝の中からは弥生土器や石器が大量に見つかりました。弥生時代後期の堅穴住居はどれも方形で、溝は南北方向に延びていました。また、その近くを流れていた川の跡からも後期の弥生土器が大量に見つかりました。住居や溝、そして川へ土器を捨てるという行為は、当時の集落の様子やマツリ等を考える手がかりとなります。

ほったてぼしらたてもの
近世のものとしては、掘立柱建物が 12 棟見つかりました。これらは大型なものが目立ち、建物の向きもそろそろものが多いことから、当時の町があったと考えられます。



川に捨てられた弥生土器と環状木製品

北井門遺跡 3次 (松山市北井門)

北井門遺跡として3次調査となる今回の調査では、縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が見つかりました。

縄文時代の遺構は、堅穴住居とお墓が見つかりました。堅穴住居は直径3.5mの楕円形に地面を掘りくぼめたものです。家の中に炉がありませんでしたので、煮炊きは家の外で行っていたようです。住居の中からは大量の縄文土器・石器が見つかりました。

弥生時代の堅穴住居も多数見つかりました。弥生時代前期の堅穴住居は家の中央に炉を持っていましたが、丸い穴が2つ連結した珍しい形をしており、煮炊き以外にも何か特別な使われ方をした可能性があります。また、弥生時代後期の堅穴住居も今年度の調査では3棟見つかり、1・2次調査で確認されたものも含めると、とても大きな集落がこの場所にあったことが分かります。

また、調査区の北端と東端では川の跡も見つかり、遺跡はこうした川の跡や現在の内川に囲まれた自然堤防の上に作られた集落といえます。川跡からは弥生土器や須恵器、そして破鏡と呼ばれる青銅鏡の破片も見つかりました。破鏡は当時権力の象徴として使われていたもので、この集落が松山平野の中でも大きな力を持っていたことが分かります。



弥生時代前期の堅穴住居

池田遺跡 (伊予市下吾川)

池田遺跡は国道56号線の拡幅工事に先立って、2,525㎡の範囲で調査が行われました。

遺跡は古期複合扇状地の扇端部の、比較的安定した微高地上に立地しています。当時の推定海岸線からは約200m程度内陸になります。

見つかった遺構は、6世紀半ばから7世紀初頭にかけての古墳時代後期の堅穴住居18棟や掘立柱建物を構成する柱穴、溝などです。堅穴住居は一辺が3m程度の小型のものから7mの大型のものまでありますが、5m前後のものが多いです。

数棟ごとの単位で集落が営まれていたものと考えられます。カマドのある堅穴住居では、一棟を除いて(SI-2は西側)すべて北側の壁際ほぼ中央につけられていました。

見つかった遺物は須恵器と土師器が大半ですが、なかでも9号堅穴住居から出土した黒色土器の塊は、6世紀代のものとしては四国で初めて出土した珍しい土器です。その他に、古墳から見つかることが多い装飾付き器台などもあります。また、土錘や砥部町周辺で採れる流紋岩の砥石も出土しています。

池田遺跡の近くには、この集落と同じ時期の古墳が多く存在していることが知られており、今後古墳とその母村となる集落との関係などを考える上で、当遺跡の調査成果はよい資料となるでしょう。



北から見たC区

いわくらじょうあと

岩倉城跡 3次 (宇和島市三間町成家)

いわくらじょうあと

岩倉城跡は、宇和島市三間町西部に所在する中世の山城跡です。3次調査は、平成17年度に行った1次調査地の西側の調査を行いました。

調査の結果、郭4面(第8・9・10・23郭)・切岸・土坑4基・柱穴約160が見つかり、遺物は主に15世紀後半～江戸時代の備前焼(甕・すり鉢)・陶磁器・土師器・五輪塔などが出土しました。

今年度の調査では、1次調査でも部分的に確認されていた第10郭の続きを確認しています。第10郭下の切

岸は、さらに西に伸びていることが分かりました。調査地最北の第8郭より北はなだらかな斜面になっていて、山を成形した様子はありませんでした。また第23郭全体からは柱穴が多数見つかっています。

調査では、これらの柱穴から掘立柱建物や柵列などの規則的な並びを復元するには至りませんでした。今後1次調査の成果とも合わせて検証を進める予定です。



第23郭

いたじまじょうあと

板島城跡 (宇和島市和霊町字亀次)

いたじまじょうあと

板島城跡は、宇和島市和霊町に所在する中世の山城跡です。旧宇和島市北部、高串川と須賀川の合流地点西側の丘陵上に位置します。

溝や通路・土坑(穴)・柱穴などが見つかりましたが、

山城本体の調査ではなかったため遺構の数としてはそれほど多くありませんでした。遺物は縄文土器や弥生土器なども見つかり、中心となるものは室

町時代(15世紀)頃の土器です。土師器(皿・杯)・備前焼(甕・壺・すり鉢)・常滑焼(甕)・瀬戸美濃焼(天目

茶碗)・瓦質土器・中世須恵器(東播系こね鉢)・青磁(碗)・石製品(茶臼・砥石・石硯・碁石)・銅銭などが見つかり、

これらの中でも瀬戸美濃焼の天目茶碗、瓦質土器の茶釜や火鉢、石製品の茶臼が特に注目される遺物です。これらは主に茶道具として使われる物で、当時の板島城城主が茶を嗜む文化人であったことがうかがえます。

また城は眺めのよいところに築かれており、北側は三間・吉田方面、東側は鬼北方面、南側は宇和島方面をのぞむことができ、周辺に点在している山城も見ることができます。

このように城の立地や規模、出土遺物などから、板島城跡は15世紀(室町時代)頃において、この地域で中心的な城であったと考えられます。



溝状遺構(豎掘?)